

武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を
楽しみながら学ぶ



渋沢栄一と養育院感化部

2024年から新1万円札の肖像になることが決定し、大河ドラマの主人公にも取り上げられるなど、各方面から再び注目を集める渋沢栄一。明治期に数多くの銀行や企業、鉄道会社などを立ち上げ、近代日本の礎を築いたことから「日本資本主義の父」とも呼ばれていますが、経済界への貢献だけでなく、さまざまな社会福祉事業にも尽力していたことは、意外に知られていません。そして、実は武蔵野市とも深い関わりがあったのです。

渋沢栄一が進言した 養育院感化部の武蔵野移転

現在、井の頭自然文化園がある御殿山1丁目に、かつて「東京市養育院感化部井之頭学校」という名の施設があったことをご存じでしょうか。明治38（1905）年、それまで東京・大塚にあった東京市養育院感化部が、郊外であるこの地に移転してきたのです。

養育院は、生活困窮者などを保護する民間施設として明治5（1872）年に創設され、後に管轄が現在の東京都に移管されます。その初代院長を務めたのが、他ならぬ渋沢栄一でした。渋沢は、亡くなる昭和6（1931）年まで院長を務め、どれほど忙しくても、月に1、2度は施設を訪れ、入院者と交流を図ったといえます。本院（養育院）は、浅草、上野、大塚と移

転を繰り返し、最終的には板橋に落ち着き、「東京都健康長寿医療センター」の名で今も存続しています。

養育院は、生活困窮者の保護だけでなく、老人養護施設、孤児や遺児などを保護する児童養護施設などもつくり事業を拡大していきましたが、その中に非行少年の更生を促す「感化部」も設立されました。ところが、養育院の入院者と非行少年を同じ場所で生活させるのは問題ではないかという話になり、本院と感化部を切り離すことに。

当時、感化部では更生のために農業など取り入れていましたが、都心では十分な用地を確保することも困難です。そこで白羽の矢が立ったのが、武蔵野でした。明治38年当時の武蔵野といえ、武蔵野村の誕生から16年がたった頃。まだ農村の色合いが強く、人口は4千人にも満たなかったとい

ます。現在の御殿山1丁目辺りは、江戸期には幕府の直轄領でしたが、明治維新後に皇室の財産である「帝室御料地」となります。渋沢は、この自然豊かな土地に養育院感化部を移転させてはどうか、と進言したのです。「帝室御料地に非行少年のための更生施設をつくる」という大胆な発想はいかにも渋沢らしいですが、宮内省から御料地借用の承認を取り付け、9千坪もの敷地の確保に成功します。こうして、明治38年9月、今の自然文化園の北西部に分院として東京市養育院感化部井之頭学校は誕生しました。

周囲から隔絶されつつ
地域との交流を図る
合同運動会も開催

569坪ほどあったという建物の周



感化部井之頭学校・工科作業

囲はぐるりとトタン塀に囲まれ、周囲とは隔絶された、現在でいえば少年院のような様相といえるのではないのでしょうか。生徒の1日のスケジュールは厳格に定められ、勉強だけでなく、農業や園芸、木工、裁縫などの作業も重視されていました。敷地内には、農業実習用の畑だけでなく、体育ができる運動場もあり、ここで行われる運動

会に周辺の小学生が参加して合同の運動会が行われたという記録もあります。

地域の子どもたちは、親などから「あそこは危ないから近づくな」と言われることも多かったようで、この合同運動会が感化部の生徒たちとのほぼ唯一の接点だったのかもしれない。はたして、感化部の生徒たちは、同世代の子どもたちをどんな気持ちで見ているのでしょうか。

自ら非行・問題行動を働いたこと自体は確かに良くないことだとしても、彼らの生い立ちや置かれた境遇は、彼ら個人というより社会全体の問題でもありました。弱い立場に置かれた彼らの境遇を少し想像してみただけでも、見え方は変わってきます。感化部にまつわる公文書も保存・管理する武蔵野市立ふるさと歴史館の公文書専門員・高野弘之さんはこう言います。

「少年が吉祥寺周辺で非行・問題行動を働き、当時の養育院感化部に収容される際の具申書などが歴史公文書として残されています。客観的な事実だけを見れば、盗みなどを働いた悪い少年ということになります。彼らがなぜそうなったのか、その不幸な生い立ちや苛烈な境遇が、こうした歴史公文書からも垣間見ることが出来ます」



井之頭学校第21周年記念運動会にて
(大正15年11月4日)

社会の中に存在する問題にはそれぞれ背景があり、そこに目を向けることも必要です。問題の背景をどう捉えるのか、今もなお社会の課題として残されているといえます。

渋沢の訓辞に背中を押され 感化部の生徒たちは 社会に巣立って行った

こうした問いに対する一つの解答として、大正6(1917)年4月、感化部井之頭学校で行われた証書授与式で渋沢が生徒に披露した訓辞を紹介しましょう。今の言葉で要約すると、以下のようになります(要約は筆者)。
感化部井之頭学校の存在意義と渋沢の

人間性、人生観が凝縮された見事なメッセージです。

「今日は諸君にとつて、誠におめでたい日である。これも諸君が日ごろ一生懸命勉強した賜物で、さぞかし諸君は非常なよろこびを感じていることであろうが、この証書を受けることが出来た諸君より、この証書を受ける自分はおお一層の愉快を禁じ得ないのである」「私も23歳になるかならないかの頃から親の世話にならずに独立して奮闘してきた。自分の精神の強さがあれば、親のやっかいにならずに何事でも成し遂げることが出来るものだ」「これから世の中に出ていく上で三つの大切な事柄を挙げたい。まず、第一に誠実であれということ。いかに知識は優れていても、誠実さがなければ決して人として成功することはない。

第二に、勤勉、一生懸命に働くこと。その日の仕事は必ずその日に済ませ、後に残らないよう心懸ける。怠惰で成功した者は一人もない。成功を望むなら、寸暇を惜しんで働く決心がなければならぬ。

第三に忘れてはならないのが忍耐である。どんな困難に遭っても決して屈しない心である。社会に出ると今までより数倍も苦しい目に遭うだろうが、

その困難に打ち勝つ事が出来ずに挫折してしまうようでは、とても将来の成功を期待する訳にはいかない。

さらに付け加えると、受けた恩への感謝の気持ちをいつも忘れないこと。同情、思いやりの気持ちを大切にすること。苦しんでいる人を見たら、自分のこととして捉え、何かしたいと思う心。単に自分の利益だけを考えて他を顧みないことは、人として最も戒めなければならないことだ」

大正6(1917)年の「井の頭恩賜公園」の開園、大正8(1919)年の中央線の吉祥寺駅までの電化に伴う来訪者の増加、関東大震災をきっかけとした都心からの人口流入によって武蔵野村の人口は急増します。そして住宅地としての発展に伴い井之頭学校が「地域にふさわしくない存在」になっていったことは想像に難くありません。その結果、昭和14(1939)年に井之頭学校は東村山に移転。跡地に現在の「井の頭自然文化園」がつくられることになりましたが、資料館の建設には井之頭学校の廃材が再利用されたといえます。自然文化園に行く際には、渋沢の訓辞を受けて社会に行き行った感化部井之頭学校の生徒たちに思いをはせてみてはいかがでしょうか。